慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『大織冠』絵巻二種紹介
Sub Title	A study of Taishokkan picture scrolls
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2022
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.123, No.1 (2022. 12) ,p.30 (199)- 42 (187)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	屋名池誠教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01230001-0030

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『大織冠』絵巻二種紹介

石川　透

一、はじめに

『大織冠』は、幸若舞曲の一作品であるが、意外にも奈良絵本・絵巻が数多く作られている。奈良絵本・絵巻は、室町時代末から江戸時代前期にかけて、京都の絵草紙屋を中心に制作された、手作り手彩色の豪華絵本や絵巻のことである。一方で、幸若舞曲とは、室町時代に成立した演劇の一種の総称である。『大織冠』は、幸若舞曲に属するが、その本文が散文としても享受され、御伽草子と同じように、絵本や絵巻に仕立てられた作品なのである。

奈良絵本・絵巻については、最近、拙著『奈良絵本・絵巻　中世末から近世前期の文華』（平凡社選書、二〇二二年七月）にまとめたので、それらの拙著を参照願いたい。また、幸若舞曲については、文学史上・演劇史上の意義や作品群の説明が、数多くの専門書になされているので、それらを参照していただきたい。本論文に記す『大織冠』の絵本や絵巻については、小林健二氏『中世劇文学の研究』（三弥井書店、二〇〇一年二月）や恋田知子氏『薄雲御所慈受院門跡所蔵大織冠絵巻』（勉誠出版、二〇一〇年三月）等にうまくまとめられている。

二、『大織冠』

最初に、幸若舞曲『大織冠』のあらすじを簡単に記しておきたい。

大職冠藤原鎌足の娘は、唐の太宗皇帝の后となり、宝物を藤原氏の氏寺である興福寺に寄進しようとする。ところが、宝物の宝珠（ほうじゅ）を、海中の竜王は奪おうとし、阿修羅の眷属を遣わして、船の護衛の将軍と戦わせる。阿修羅は敗れるが、美しい女人に化けた竜女によって、将軍は宝珠を奪われてしまう。鎌足は取り返そうと、四国志度の海女と契りを結び、子まで成した後、海女に竜宮にある宝珠を取って来るように頼む。海上で管弦の遊びを行い、竜王達を惹きつけて、その留守に海女は竜宮に入り、宝珠の奪還に成功する。しかし、留守番の竜によって海女は殺されてしまう。海女の遺骸と対面した鎌足は、海女の胸に隠された宝珠を見付け、宝珠は無事に興福寺に納められる。鎌足と海女の子は、後の藤原房前となる。

このように、歴史上の人物が登場しているが、話の内容は作り話である。ちなみに、藤原房前は、鎌足の子ではなく、現実には孫になる。この話がどのようにして作られたかは、簡単には明らかにできないが、室町時代には、幸若舞曲として演じられていたのである。室町時代の演劇としては、能が有名であるが、この能にも、『大織冠』と同内容の作品が知られている。それは、『海人』であるが、内容的には、『大織冠』の後半部に相当する。この能『海人』は、四国の志度を舞台としているが、志度寺には海女の伝説が現存し、海女の碑等の遺跡や、『志度寺縁起』の掛幅（かけふく）等が残されている。掛幅の絵は、志度寺の僧侶により、絵解きが行われたはずで、古くからこの話は知られていたのである。

幸若舞曲の本文は、同時代の演劇である能の本文に較べれば、韻律的な部分が少なく、書かれた写本だけ見れば、御伽草子の作品群と大差はない。それで、幸若舞曲は、盛んに絵本や絵巻に仕立てられたのであるが、『大織冠』は、幸若舞曲の

中でも最も人気があったと思われ、上記小林健二氏の著書にある各作品の絵入り本の一覧を見ても、数多くの奈良絵本・絵巻が残されている。

そうした中で、形としては珍しい『大織冠』絵巻二種を、挿絵の画像を中心に紹介したい。最初に紹介するのは、元々絵のみの作品である中型絵巻である。日本の絵巻は、その多くは、詞書（本文）と絵が交互に登場する。特に奈良絵本・絵巻が数多く作られた一六〇〇年代の絵巻は、ほとんどがこの形態であって、最初から絵のみで作られた作品は数少ない。『大織冠』の後半部と内容上重なる『志度寺縁起』の掛幅は、絵のみであるので、この掛幅と関係するかもしれないが、ともかく珍しい作品である。なお、本絵巻の大きさは、普通の絵巻の大きさ（縦約三十糎以上）に近いが、便宜上、中型絵巻と呼ぶこととする。

二つ目の小型絵巻は、中巻のみしか伝わらないが、この大きさの絵巻も一六〇〇年代の制作では珍しい。室町時代後期に小絵（こえ）と呼ばれる小型の絵巻がいくつも作られたことは知られているが、小絵のような素朴さは無い。まさに一六〇〇年代半ばから後半にかけて制作された豪華絢爛な絵を伴なった絵巻なのである。そして、さらに驚くのは、本小型絵巻と酷似した絵巻が存在し、紹介がなされていたのである。それは、『立正大学古書資料館蔵奈良絵本『大織冠』上巻（中巻・下巻）』と題して、伊藤善孝氏が二〇二二年二月までに立正大学図書館から刊行していたものである。この本は、立正大学が所蔵する二種類の『大織冠』の絵入り本をカラー写真を入れて紹介している。

立正大本の内、三軸の絵巻の方は、縦一七・二糎で、今回紹介する小型絵巻と全く同じ大きさである。挿絵の描き方や絵巻としての体裁もよく似ている。中巻だけを較べると、絵の数が今回紹介する小型絵巻の方が一枚多かったり、本文の筆跡が異なる等、完全には一致していないが、おそらくは、ほぼ同じ時期、場合によっては同時に、絵草紙屋によって制作されたものと考えられる。

一六〇〇年代後半の絵巻には、同時に制作されたと思われる絵巻がいくつか現存している。絵草紙屋は一点ずつ、絵巻を作り上げるのであろうが、同時に複数制作した方が効率的である。需要のあるような人気の絵巻であるならば、同時に複数

制作した方が、利益につながるはずである。

三、書誌

二種類の絵巻の書誌は以下の通りである。

中型絵巻

所蔵、架蔵

体裁、絵巻、一軸

時代、[江戸時代前期]写

表紙、紺色地金繡

見返、金紙

外題、ナシ

内題、ナシ

紙高、二八・三糎

料紙、斐紙

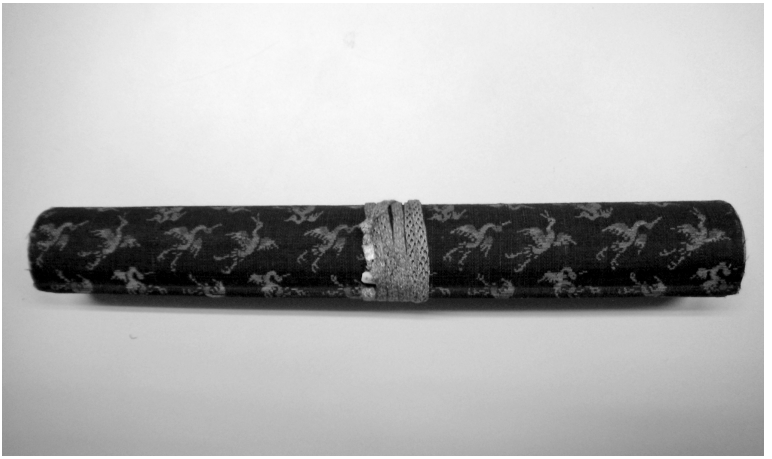
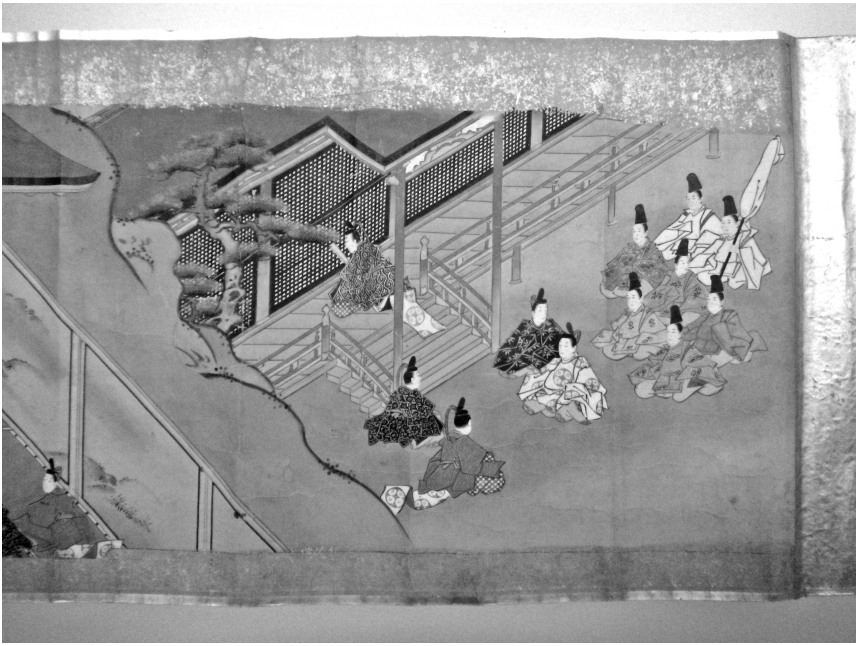
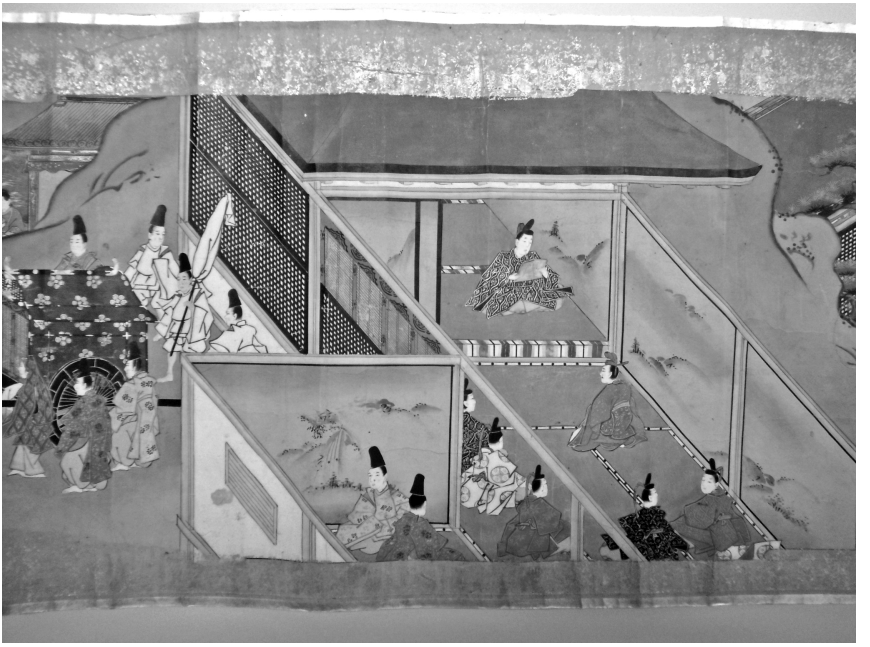
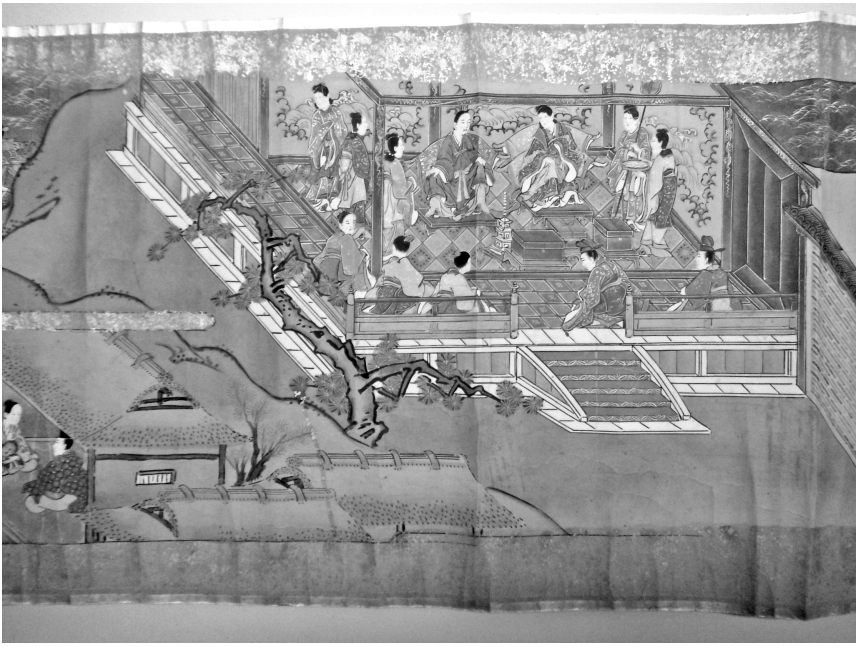
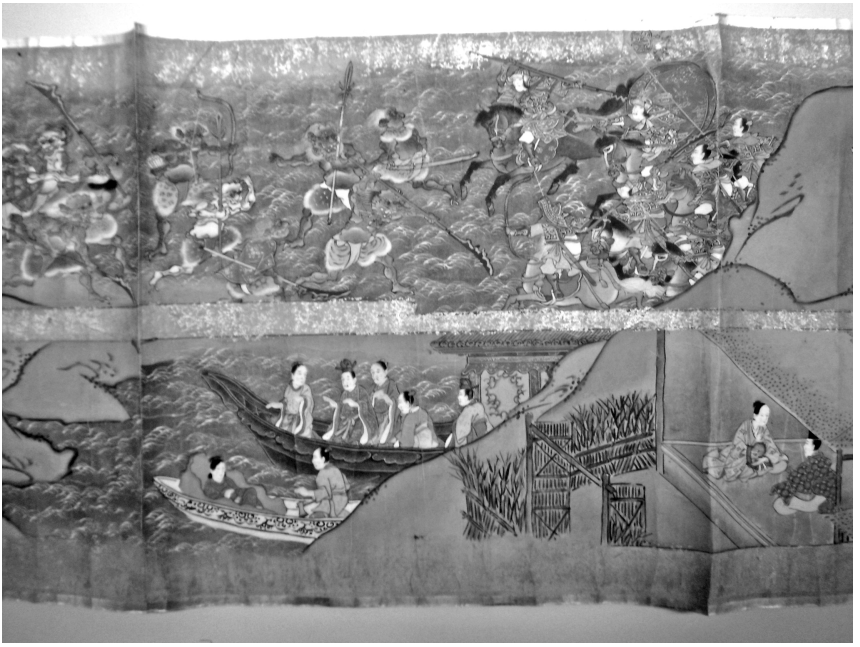
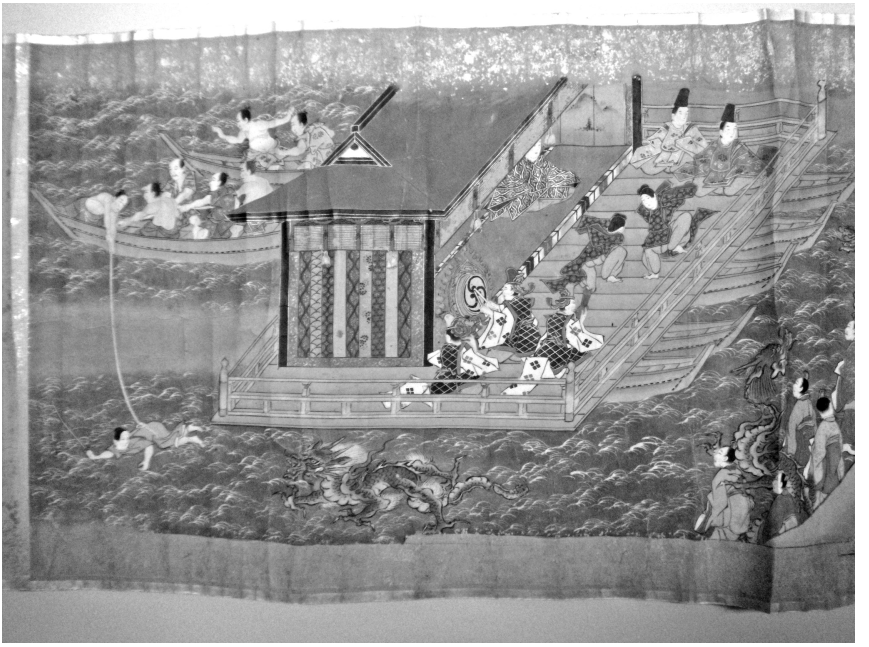
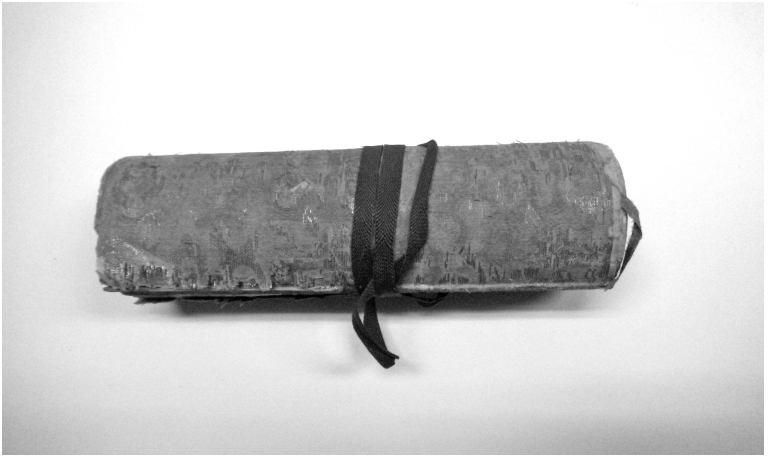
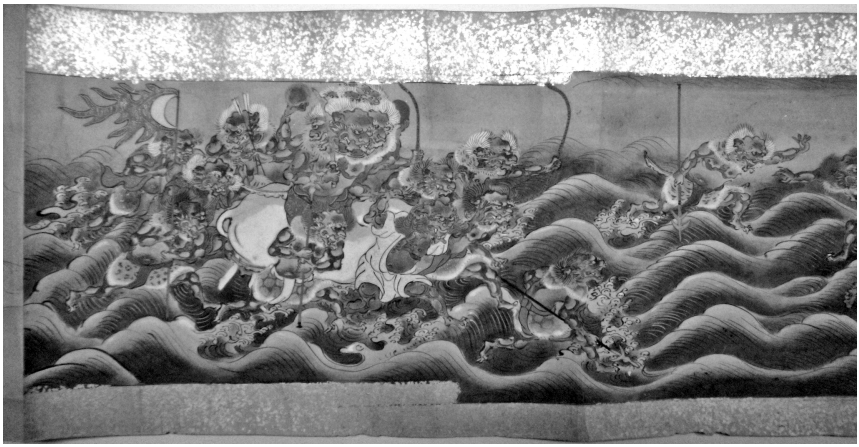
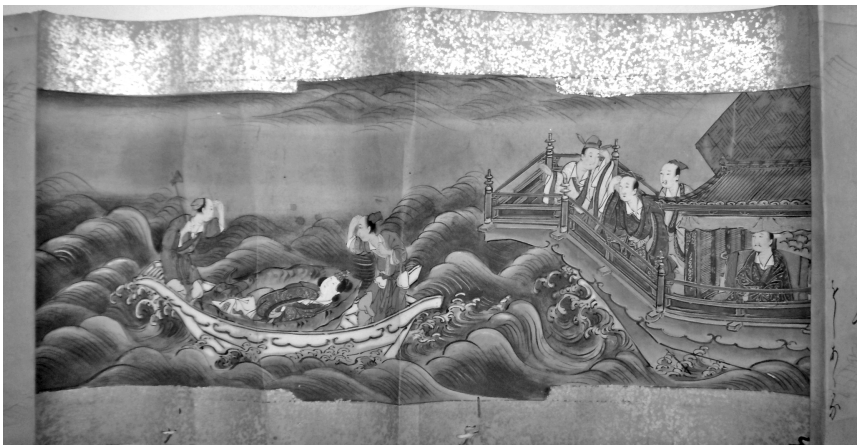
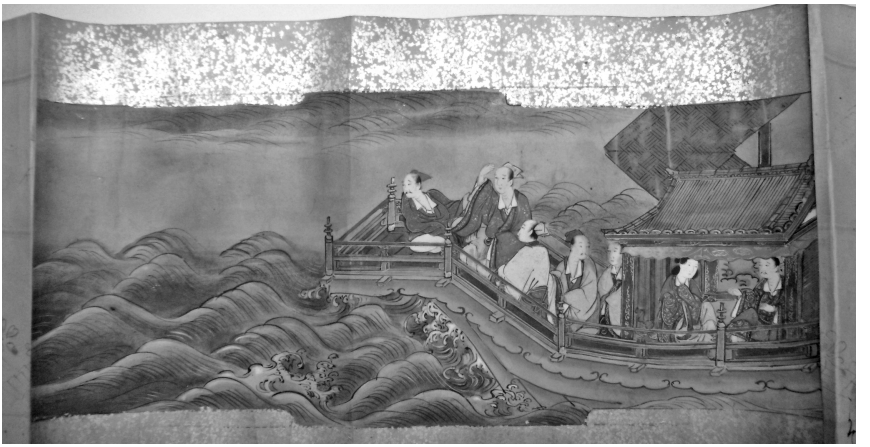
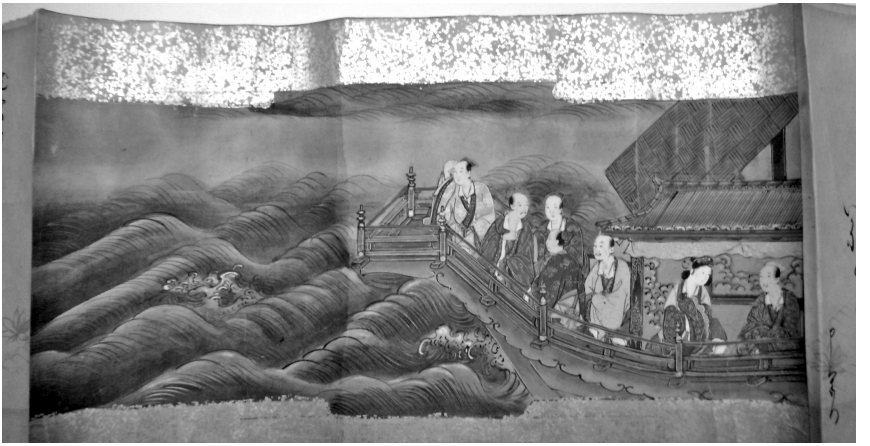
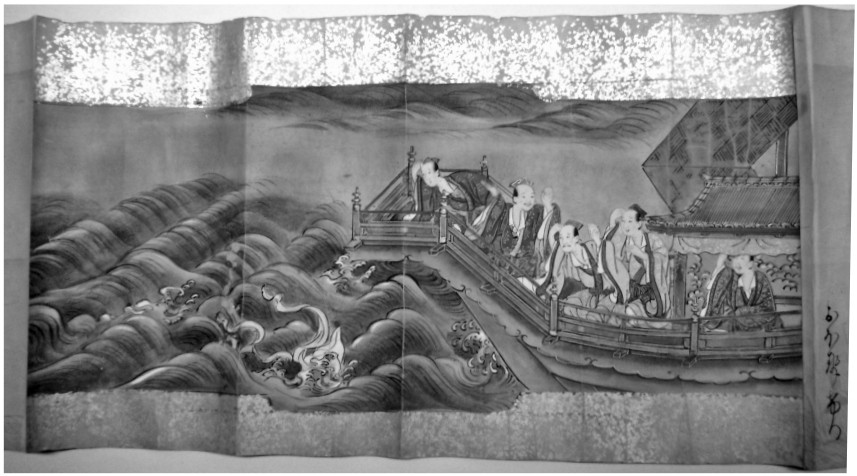
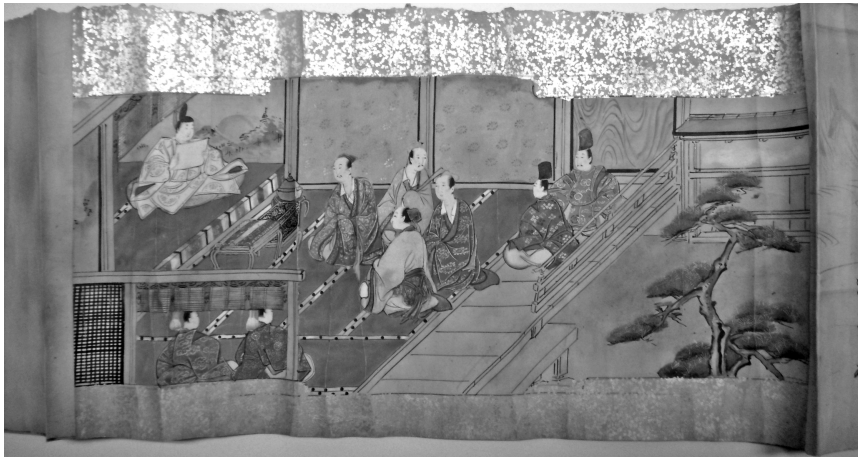
挿絵、全体（元々詞書ナシ）

奥書、ナシ

小型絵巻

所蔵、架蔵

体裁、絵巻、一軸（中巻のみ）
時代、［江戸時代前期］写
表紙、黄土色地金繡
見返、金紙
外題、ナシ
内題、ナシ
紙高、一七・二糎
料紙、斐紙
挿絵、六図
奥書、ナシ

四、挿絵写真

以下に、『大織冠』の中型絵巻と小型絵巻の挿絵を続けて写真で掲出する。それぞれの冒頭には、閉じた状態の絵巻を示してから、中型絵巻、小型絵巻の順で示す。なお、小型絵巻の第一図は普通の挿絵の倍の幅があるため、第一図のみは二枚の写真で示した。